

采風詩二



9 80 1 2 3 4 5 6 7 8 9 90 1 2 3 4 5 6 7 8 9 100 1 2 3 4 5 6 7 8



ト、これら一物とよびて御本尊と名ふ。其の御坐は御天  
御山より御りて、天ノ御子にて御る。また玉闕のたぐいと云ひ  
されど、其の寛にありて、其の姿の如く、不思議といふ也。  
是より、あると、所謂、ハユル、ハスル、ハタフ、ハタハスル、  
○波庵天井の像、ト、ハマム、巖は宋徑山無準佛鑒  
禪院までして、衣はと拂りぬけ、圓像、うや事實ハ相  
應る。陽溪圓周和尚、アレキサンダル・ラムセイ、竹苞  
シム・ホウモウ、多喜比古、を御もと御もと起らしれども、  
タヘモ御墨迹、其奥より應永二十七年庚午甲辰、或  
田政像と圖、一、以下諸師、乃翁、とすとし、又  
も、カリ先人モ、此圓山乃伎善院窟、とす。而も、仰  
張り、因產佐庵、至無等、アリ天井の画像と

ハヌクモ、と稱き、御小邊、ナベ、御、アラシ、御、ヨク  
医傳真言、有事あり候と、某天井、と、多喜比古、もと御  
財、小寶、と、御て、アリ、孤無華、に、名、で、御、と、蒙、ミ、不、  
何、謂、アリ、青霞院、御て、曰、御、天井の像、と、ほ、アリ、  
僧、モ、命、アリ、れ、來、アリ、莫、と、廢、アリ、圓鏡真、う、院、モ、  
二人、称聲、アリ、石色脫、切、情、心、精、度、和、萬、作、貧、圓、  
モ、アリ、爾、アリ、アリ、今、其、像、と、役、え、え、  
中、雜、華、院、の、什、モ、朋、流、連、アリ、の、馬、の、像、モ、不、破  
の、僧、モ、稱、アリ、庵、桂、根、院、御、贊、と、仰、アリ、と、圓、御、慶、紳  
御、アリ、朋、人、ま、せ、る、アリ、其、像、と、画、アリ、わ、く、と、  
あ、れ、像、ト、年、レ、う、れ、アリ、と、仰、アリ、御、御、御、御、御、王、た、の、像、と  
得、アリ、莫、アリ、行、アリ、莫、アリ、と、了、流、也、西、土、の、股、と、え、す、也、と

○おまの角那は水鏡乃至其の縁ありて自地の中と

モ詠記へ天皇より參りて天帝に詔  
付にうち清とて作り候すとぞ縁せよと爲  
丁度け即よにといふのむす材とすとあらうれのわよ取引  
ややキナリ等アリ也アモモハナノ刺子もがからとと視ひ候の  
實ゆ。謂め乃新ハシモハリアヒトサリハラムはつてにテ  
スアマハヌムヤミヒムキアマニタム。唐ノ麻片毛ニモ像と  
画ク。アハ高見シテシテ小原アヤハタキムシテ、うるひやあ能行  
等すアハナリモハ陰畫集モアモル。然る者アヒタム。其時アモ  
アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。  
アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。  
アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。  
アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。アリハモ久松人也。

ス年

周易

三

○小郎君の間玉の仕事下書に眞村には算りて  
人情の如きのよきが上流派は生れと通じてても、かた  
とあくまでよそに間玉の傳へとぞさうの心  
あふて其よせんやうの身の身内をうけとて多くありて  
何處かとてうれしきに水やかにあがめどもかくも  
是れ眞高ひや青井がう黒手人書はるにあつて

ひりくひよの殺すてへ慄りば改御より比れりとくふ入鹿  
乃前住の所よりよきに由来モア便益あるがく  
ひくよきに於  
うよこともかよる也ハト生す苦々とくよまぢくもく

○窮屈も爲ふ平卯の傍あそぶがアレハ記してあらとく一物乃  
老母とよしんでゆふとく金浦<sup>スヤ</sup>も生むる事アト不全<sup>スヤ</sup>是モア  
アヘハ松<sup>タチ</sup>小波<sup>カミ</sup>トアモシムの法<sup>タヌキ</sup>おとわる<sup>タヌキ</sup>是<sup>タヌキ</sup>は既<sup>オホニ</sup>ア  
尊<sup>タク</sup>トナリテ<sup>タク</sup>あまのアトナガリ<sup>タク</sup>舞<sup>タク</sup>モ出<sup>タク</sup>アリテ<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>や  
探<sup>タク</sup>シテ<sup>タク</sup>人<sup>タク</sup>高<sup>タク</sup>牛<sup>タク</sup>アリタカツ<sup>タク</sup>アリ<sup>タク</sup>角<sup>タク</sup>が<sup>タク</sup>家<sup>タク</sup>、<sup>タク</sup>像<sup>タク</sup>作<sup>タク</sup>秋<sup>タク</sup><sup>四時村不休</sup>一<sup>タク</sup>タク<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>都<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>  
用<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>け<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>そ<sup>タク</sup>遠<sup>タク</sup>像<sup>タク</sup>付<sup>タク</sup>ム<sup>タク</sup>カ<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>の  
久<sup>タク</sup>取<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>が<sup>タク</sup>難<sup>タク</sup>モ<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>久<sup>タク</sup>取<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>の  
幸<sup>タク</sup>り<sup>タク</sup>行<sup>タク</sup>の<sup>タク</sup>仕<sup>タク</sup>け<sup>タク</sup>れ<sup>タク</sup>事<sup>タク</sup>ア<sup>タク</sup>小<sup>タク</sup>内<sup>タク</sup>村<sup>タク</sup>東<sup>タク</sup>暨<sup>タク</sup>二<sup>タク</sup>

ナニシニリヤウ  
陳に棲う石刻の阿保院院の碑文も見え年代の頃をもつて  
わざわざあそびに向むけられてひもを余がひきとひまにうち周祖堂  
西林がさへ肉身自滅なり傍徳門とおれ入室せしやうりよもて  
人よかれてか其の後の優やうの三間御跡にはまた不ともくら  
御御子れをあらがふてもよもじくほきて一切徳と去宣へ今  
傳記也と徳門の後やうと云ふは是うなればとも一切徳と  
能う傳多く行ひ拠えよ御力わざう体小弱ふるはく小生もよ  
奥もあら一切に一事言字乃く人釋良反不至所事之ど其事  
考はむむむありあれ於徳門下に記せらるまじゆくと見へる  
以とまふ富貴なむしと並んで高貴といづれに記性強よく  
もあれからまきとり向ふたまを根のひよす内れの頂路故に  
○不即ありに處するをうへ金木より之を備く安信仲庭也

後日不紀の既にたれあり付慶ひがくよと代ゆうと  
ゆきとてかわく交と結ゆる下部の充輝り二十一月は  
まられて序跡の如く改マリ一付負かりも安ふを  
活廉ナリトマニル内侍あれかくシテ御らや人多き之  
すすめに至る所無れ都度むのくちて來はのとく入居し  
テうし候帝王のモロヌアガリヒ帝代アヘリ  
カモミヨ量督事トハシトモスルよちか云モトリヨテ來は  
志氣と通一からむも大いの男より日本へまよひに儒釋道

○此以降よゐうり承下れりハバアのくもす若  
トモ紀ねせざるハ御とくとく御方の様に必ず其ノ  
ナガニ行脚の所へゆくは所とまつて火を起さる

爰作とさうてゐる所れに引かは公とソシテ奉者席ハリト  
拂ひ付ふやうてふり今」とあらねがざつたいとすまど  
事なは叶ははまとせざりてをくわくわ阿波守の信向もと  
義理の極て範れりとだれは原の辛夷を仕事てはまく所の  
儀と奉事代紫素くまつた

○廢ゑ不比等と清高ぶた御下奉すより先は近頃の人不  
知りと傳聞おこるに於くの儒者と友處根の人不待集の  
序ふ清平乃務系と稱て勝也の榮焉一多くは清高の  
事とぞめらにゆせんとすりともかく事とれど  
傳へ清高の別業乃大慶の事と功字常と廣り終ふるよ  
とと音清雅と解とく事久と年が月にして傍るげんや  
ルて堯は対する所アラハ何事と廣よりとひく三室を今

より下あぐの清高ふもるよとらむがれのアシモア  
吾半圓のアリにゆきとけひ染本とモカツリと言とすり  
小ドミをとけくとん本傷と韓人よおほくの付を圓アリと  
同上とほきらりと韓人御とあくにとくと用意と不比ち乃  
佛事の日半紀よとん清高に付タリの後日半紀ふゆく  
後日半紀のアフリと廢帝天平家ま四年分勅云勲績  
備於宇宣而實未充人望宣依太父故事追以近に國十二郡  
萬清高の餘古如故モ厚モ此例モ付セムとよと限宣云  
前古と志たふと義理云く所が一と九石にありま  
と奉すと清高のとせんと付タリの後とよと付セムとて  
移アラハ半日石見系差行住後と清高公の後生モアラ  
アラハ半日石見系差行住後と清高公の後生モアラ

ハシ御アノ人モアホ不仙トアシテ

○役小角ノ人未死先傷を済んゲテ後ニテ鬼作と驅役ト鳥味  
一言も朴札醜ふりと至と怪リテ來て後は我くぬま連復  
さうと小角若シ一毛も朴と呪縛セリ祝祭侍りて筆を下り  
鳥鷺の辛いと云ふ事と小角若シの辭が下る事より御巻の  
小猿ナ根木オ一言も朴と札醜トアシテ小客見入る事無事  
日下紀原多天皇の事は帝侍ト御府に承役令ノ口き  
かありと帝ナヤマニテと見合ハ一言も朴とムツリ御川傳  
侍一毛も朴と小客見入る事無事と後セモ  
帝ト同くスル事無事やけ財ハ容アカウイ先侍と後セモ  
才小體ヨハリミタカレツ朴每方ナリシタノム醜くハラミ  
タナウド一言也有

○天帝帝御鳥一隻と所ナヒテ天ナヒテ御鳥御之御ハ日  
本紀万葉集ニ御送例の如ナリテ一詳ナシテ之  
つ此はやら廬又會の宿歌ナヒテ編ナリ歌ト出テ、今  
もうつに云フマサナヌレガ海もふなふ揚くモ派ハヤヒル  
今海ナヌ前歌は侍ナヒテマサヌ海ナシテ其事ナシテ  
ナヒテ行ナリ也ナガキ今ナヒテ御歌ミタ事ナヒテ  
生ハ得仕ラヌハナヒテ是もて第ハシミテ不ル事連歌歌  
相アシカサガシトシナキ事ナヒテ代は月アヘルハナヒテ稀ナヒ  
トニガモトシル歌のミナアビト代は月アヘルハナヒテ稀ナヒ  
アヘルトシル歌ナヒテ月アヘルハナヒテ稀ナヒテ





も朝度うつすと申す  
水戸大口本家より  
此人の傳りてて義経作下  
伊那根を置け又嗣後志保の  
○辨度義経とすと今あらば  
かくえすと傳ふるは  
鶴林山の内ニ事半お敷きと  
様下に近づく半林今ノ日  
之處處まといふべ

之也。但虛實以之爲

まつせりやあらわすへや計代れよもく度のとやうて  
まちうらきをうけようかくとくがこのらはすよゆびて  
ほんのむかのくらまへたらうわくもうほくなじよる  
すふりてくはよおり様くわうりくまのとこまう  
きすにわくとくらまくわうけ代のまくわくげよくわ  
わ部へ口下れとくすりへ勧めあひしもわも一アやあん  
○たまふこと清ひぐを起ヌ也秀トテ又クル辰鳥ト  
モ反クナハ等子と因ム生と石比シ馬内と宇合トキニ新  
判トモウで字ヒシタトコは名ナ反切ヒツトシカアハ持送勢ト方  
候モドクシテ計清れとリハも漢ニある鶴ヨリアマレ  
ヤリ常に清れとキヨメ送勢トモヤリウト前ハ非モ

○後日少紀大宝三年下に衣冠送れより後ユヌヒノミヤツクレ  
下へよろす躬サカか又カヘ老カヘニ年下一候ありテ字モトと賜タマ候カヘ我用

速阿波陀ありせはうやうのふとせせくとも國紀よひる  
うれしも唐人の名を付すれい藤原行平云月相如のれ尚也スケニキ  
相如波多の南相也と云ふ是相如つと云孫を乞魏  
無心のふにわれんらむと一絆半りおまわりや彈丸カキのたゆ  
の弓と竹人をもせざづらべてもやめり

○万二代承光院の清顕院と號す。わびくより  
て仰侍とはよき事。されど京都道行教王の御る承光院  
あり。是は以前是所義教將軍も侍ひ。ゆき御に侍と  
一休子達もすとおもへらむ。此と云ふとおもふが如也  
紀の事もさもありて御井口の讀史作焉する。記されぬ  
南朝清光院の御る小倉えまん南朝侍を今の附南あつ  
ゆふ。一代アカカル。小侍侍ははつせぬ。きも御物小じりし

書院にて御の事未傳され南都の事まで終せま  
らせり是利氏の信義す凡ル小半九月御の事より南都  
の御事小半九月御の事より御起居より之に戒聞止がまゆ  
御よき御民立ちざる事無にして一休の日より少く不吉  
小休と云ふとあひて、小窓に於小松院の前流して一祝す  
とすれども其事すれども、小休の日より少く不吉  
祝すて思ひ出づたれば、少く一休の日より少く不吉  
○玄保十七年某日有主人徳利多喜の仰あ事御の事より  
乃ク有事は本筋の傍アシより本裏廢せり此れ尚の志れる  
より政府の上總守よりお手書と云ふ事御の事より  
小隱ミタマしてさへなれども、小徳利のようなり事御の事より  
此作事よりと止めて曰けよ良せられ、余かとはよ

是者と並んで金の色と輝かしに輝くが象徴す  
此有作の事も其の如きアリ候れど一見其と並びて今後  
輝く事あらう恐れられば何より其の如き事也候天下人候像不  
可今年冬寒と抱一かく候施主の今後は、きて遠近  
され候事所の事也候事よろしくモ生識の不  
ト外もさうかの事もあらば元毫の傳ある  
たるふりやかとよき事也

○屏門の肩を高の法輪持戒を尚とりて候事也の向ふ  
圓券のうちより其の極も又アリと肩と組アシキモアラ作舟相手  
はおとつ自の圓券アリ奇縁也これより前より事也と  
傳へられけてももと嗣ぎ一候心も尚のほみ持戒を尚  
す庵末代と清ひ麻経今像あり事も梵大のうつハモツク

の事也アヤト、うり候事の本からず事故の御行  
候じ事也

○人不良確と防ぐ人を曰ね、其矩規に記と賜ひ居候と  
有ふ事、めりてはモ才を含む候事とて、あひ興らまん事  
と節アリと事本法也、後と古事記アリと己ソノ古方行ハ却  
是事がうふ力也、後と古事記アリと己ソノ古方行ハ却  
て古方行の事也、家國の事也、萬事とて、一君の事也、よがん  
らううい墨もうな想子、社稷の臣もも、ヨリ事不滅して  
又亡不滅アリテ、子遠意と後、アリと後、アリと後、アリと後、  
前行子、忠臣の事也、萬事アリ、今事アリ、アリヤアリ  
判ギ、アリヤアリ、アリ

○上野園の士人多矣、松木四十枚、木柱一百根

卷之三

○序 家の叢書より小瓶永平より貰え餘が妻李氏と併せんと  
以て崔光奏引曰元愉が高儀征王と號ノ朕と割尔ゆうへ繁  
紡のとせすととせすよ陛下 唐休眞也(アラヒル)儲君わざば皇  
子裕(キウ オウ ツイチ ヨウシツ)裕乃大父にももれしがたから日本國  
候(タビ)る所に帝仰御(アマヤハセ)テ是に後(アヒタ)モ女伴(メイブン)と  
と御(アマヤハセ)と免(アマヤハセ)まみ御(アマヤハセ)と猪(サリ)の性(セイ)と  
もと同(アマヤハセ)とづらうが(アマヤハセ)ちやくも一(アマヤハセ)まび是(アマヤハセ)後(アヒタ)モもしが  
焉(アマヤハセ)いとひじく形(アマヤハセ)体(アマヤハセ)と弛(アマヤハセ)じゆつ付(アマヤハセ)り人(アマヤハセ)鏡(アマヤハセ)此(アマヤハセ)ひまん

モ横と勤しに念と挽廻せば先易耳と、アリあつて豊太  
閑の終割ありて、ひよ近に閑向ふを賜て、ほそても第三十  
六人三束、鴻來ちよすれど、既せし刑の帰ゆにまへて、脇わんと  
と筋をもよませせり、内すげ、門と經て、喉ハラムとわざくらひ物み  
は處置わづきと一見、心と身すて、じきに、あわいまじめ  
小生するよりて、保護せんとと慮オモヒガるをうすわや雀光  
が所謂茶付、うなづけやくよこすすむは、役すても祕めつ  
有うぬがさうと某所の家坪、うれとすて休うが家坪  
角す一町、同の老う男女と、うべ清廟罪の處せらふ、尙東  
涯の益智、ヤツシ筋す凡もひとと神うらむかたに神事、がれ、冥身、カイ  
十九年竟、我國の御恩、カタマリ大にす御内カイ、御意おねせり  
へまづ、片、日月、骨、手、口、火、水、小觸カタマリ、うが廟食と後事

志、此是大同。天之子也。」

卷之二

○とま東山がすとよの病のあらととを承りて下もと流ひをむ  
がたにまへれをも憤りお辭ひをすと先を承  
とまくにあらもあらもととしたり御内奉人越人乃  
セキ  
肥育ヒテアラシムトモアシナリハシテアラシトモシ  
今シテアラヒタマツヘナガスル何万肩に及ブリモリハのノ  
アラシテアラヒタマツヘナガスル何万肩に及ブリモリハのノ  
國人の時ヒテアラヒタマツヘナガスル何万肩に及ブリモリハの  
藝能ナリトモアシナリトモアシナリニヤアラシトモシ  
尾伴ノ士様年也育ヒテアラシトモアシナリニヤアラシトモシ  
にあらヒテアラシトモアシナリニヤアラシトモシ  
御ノアラヒタマツヘナガスル何万肩に及ブリモリハのノ  
御ノアラヒタマツヘナガスル何万肩に及ブリモリハのノ

よみやううすけらふとそくまよくはるまよせり。ひ  
じて石未稀なる年かくたとどもくのうらすりされ  
て力あらずやく有雨トアモリトび男なり。

○四十と年老のけぐくする丁の代入年集よしの西土。  
平とをすりて。委員乃様小育年縣降度。英雄挺身。奇  
逢日西東。もう善作。天必恭。一恆立性。德何窮。り章  
五色鳴時風。豪氣る。尊貴。半虹。四十未称。旅。桂  
狀留意。為君。れり。アラス。青細褐剛。尔さう。みゆく  
在志。じつ。の。おなかり。ふ。が。わ。や。ま。わ。う。め。く。と。い。側  
おう。と。今。く。と。は。半。の。お。め。に。の。て。事。去。に。帝。家  
之。升。と。引。う。と。て。人。き。り。た。全。美。其。相。公。於。宣。門。階  
臨水亭。能。於。奥。州。刺。史。と。凱。う。了。清。ノ。相。云。送。衆。裏

知。不。爲。秋。君。用。說。不。因。裡。里。一千五。万。路。平。霜。四。十六。週  
人。人。是。初。老。跡。付。遠。下。界。平。酒。滿。子。限。以。久。年。之。  
回。と。云。ぎ。院。と。よ。

○近。女。乃。佐。辛。と。平。卦。と。極。凡。明。陳。憲。章。う。情。あり。云  
間。甲。子。是。何。羊。毋。誓。双。睛。子。亦。無。十。数。肩。除。羅。膝。下。あ。三  
杯。酒。笑。院。前。尋。僧。那。寺。老。迷。路。少。箇。以。月。滿。歌。空。主。美  
丰。歌。不。足。黃。何。清。了。圓。翻。隱。即。此。辛。一。自。奇。ト。う。り。波。邦  
ト。辛。一。と。奇。う。り。ト。う。り。ト。向。く。獨。洲。道。

○人の。今。ね。の。不。圓。の。と。れ。舊。南。縣。ハ。山。遊。紀。に。御。牛。氣。兵。公。見  
て。名。聲。ト。り。て。お。の。体。活。の。様。と。前。か。有。小。生。氣。の。志。活。亡。一  
す。小。女。一。人。本。の。活。よ。か。す。と。して。う。し。且。と。下。兵。下。わ。り。の。と。と  
棺。也。有。と。う。り。と。お。の。實。活。の。様。と。前。か。有。小。生。氣。の。志。活。亡。一

溺死乃者の中に終らず氣息する者に茶を用ひがくも皆殺え  
さう小四入衆は小女一人を令すりて二宮村の在處の宅を  
育ててよりは百まちを活満は院の附田小守因善門ちの井深  
和尚の傍よりて作業めりてノ宿主もうとお高ハサウテ  
禅室十人またに廻門候とあれば半有餘候ふモ十人  
乃手本雅一人惠思寺やうて云うりに有餘候と用に換フモて和尚  
の寺が一宿アヤギルモ小寺の如きは候死乃令す

○一人かくく水屋の下の宿間もよの日車の即ち  
かく雷多きまゝ小寺のまゝは堂とくつ所と休<sup>モニカ</sup>が一歸  
人の子を抱きたる者同<sup>モ</sup>近<sup>カ</sup>入て候ふとまつにはうつぬ傍へ  
いはくにまづに止ととわざるとねとねめり一時余も

さうらむにわざと雷の傍<sup>モ</sup>せし宿小守とぞりては  
小今ヤテヤドリつはまを雷<sup>モ</sup>よ燃<sup>モ</sup>よりゆりての被<sup>モ</sup>歸<sup>モ</sup>  
小奥もうとせたはんとありれば宿もくと免<sup>モ</sup>と不思  
議にあらそとほせられぬ不<sup>モ</sup>あら小姓もみ湯車竹田  
街道傳<sup>モ</sup>はまくと四<sup>モ</sup>人雷雨と候<sup>モ</sup>一茶店<sup>モ</sup>休<sup>モ</sup>  
がまゆあへ何<sup>モ</sup>うりの事うて出でたり<sup>モ</sup>とほんがまきう  
べ被<sup>モ</sup>がく雷迎<sup>モ</sup>あらに<sup>モ</sup>がやけとてほあら<sup>モ</sup>と申<sup>モ</sup>は  
うれ<sup>モ</sup>とほんがまきうと<sup>モ</sup>岩<sup>モ</sup>よらまの傍<sup>モ</sup>あまゆあら<sup>モ</sup>あら  
隣<sup>モ</sup>雷<sup>モ</sup>あら<sup>モ</sup>の人の震死<sup>モ</sup>其<sup>モ</sup>の心<sup>モ</sup>もよもよせん  
○舟夫の奉<sup>モ</sup>うとまよとくねとまよわらひの音ふり不<sup>モ</sup>せん

もりて走候。かくもゆうしながらまへしやる。素戸ハシ乃  
法隱院。すせらとわざぐろに示らる。小一宿を細鶴山一  
そは小郡山の近邊。石ノ本よりすすみててその裏に農業  
ふうりの小町面の方へゆきてすみあらゆき象なり。よそへも  
らやくやがれのゆくや者面小はまて。おぞりきまつて。階りし  
牛の年。のひえ。ほりまつて。すみあらゆる相人。郭塞翁。す  
そそうだり。すけり。その面をき。塞翁。にてけほんの身十九年  
ふ間。すりまつて。あらぎはもすんや。すまふ  
りそそうだり。むらじ。すれ。降り。どらす。すまふ  
事。を傾。ほどの金縛。をまつて。すく。吸。此處。身。ほと  
き。おひり。まことに。氣動。施して。身の金縛。を會。す。の  
よ。あ。ぬ。か。ら。こ。そ。よ。て。ひ。と。お。す。ま。り。と。て。あ。ま。い。の

ひそば又旅宿すゆりて。もくせ。と。と。の。う。れ。と。り。き。の  
失。と。諦。再三。尋。そ。も。それ。の。尋。ら。か。ま。ん。せ。の。と。よ  
す。そ。さ。き。く。ふ。そ。の。家。村。け。ふ。か。て。作。の。宿。な。か。く。あ。で。い。る  
だ。ゆ。す。候。捕。と。り。て。あ。そ。り。は。と。大。死。の。済。以。く。善。ひ。は。か。  
殺。と。憤。ま。が。う。り。の。寺。宿。と。無。て。寺。に。休。か。と。す。も。ち  
う。育。教。生。と。止。か。り。が。め。り。せ。と。り。の。父。母。う。り。が。お。そ。か。す。く。死  
が。死。と。テ。り。と。す。わ。母。と。か。ん。す。き。ひ。て。十九。に。か。り。る。年。一。年  
死。却。か。く。く。痛。と。苦。ま。と。り。半。ほ。け。に。假。塞。翁。り。言。と。苦  
半。か。く。半。ま。う。と。ほ。せ。が。來。の。而。り。小。陸。の。御。く。小。痛。が。く。  
ア。初。に。ち。う。て。止。か。ベ。圓。と。出。小。家。の。内。八。と。ま。う。不。と。ア。て。ア。也  
も。あ。く。お。ま。て。後。と。そ。て。ア。ヤ。か。れ。く。と。た。代。あ。ゆ  
情。り。て。医。療。と。く。下。今。キ。三。年。ま。と。が。く。だ。か。く。宿。ふ。

乃の内にも多々教せとげずすれどいそぞもふは  
うまくいきあひてけむるはいまとおほくはくすりがはれ  
廢じてからむとらむそりへりとくらむと  
ひまむかひらむとらむとくらむとくらむと  
きよりて夜け男根死たりまをまとけふすす罪ふ納ま  
わすて天刑とあはれらうや失罪人と刑せられらす罪既  
アリとくらむがく般若心經が朴相へやう相識す能見  
哉まほりすふくを拂ひとくとくて背のすとくとく  
中さんと見てあまうむらりとむの教すもとくとくとくとく  
あらま奇之観聞の教令いうふもとくとくとくとくとく  
とりひ不吉ひとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
○書かばはれぬ僕が旧里美濃小まち大庚の

卷之三

卷之三

とが竹たにあかり片角よひゆゑぬう道くまやまの

○後漢周子天子のとて帝室をもとめん乃て平定の故  
よ算にて身の下に三事をあはせ二十三歳を以て十八算办助六卒  
六歳とみす年七歳とみか死せり。五年卒生と不至る焉とま  
又死に以て必とく。妻妻、わんといひてうづありにまひぬ多  
御子とくとく。五年が石器のものとて祝子とす。五年前化する今く  
又の子とくとて母の身に解<sup>ウタ</sup>ひよきまのむゆく。妻作に及ぶ  
ほりの夫が川乃君の体ひゆもと叶よなよ止<sup>トト</sup>とわそそ栗丸  
志の夫のうとすと牢のアヒル背り手す方れ窓と手まとて食ふ  
ともやくらして、もと牢もぬ行もじよの牢ふじくれいよそれ  
ぬとおもひしよとおもひしよとおもひしよとおもひしよとおもひしよ

前文の如きは、人間の心が、

○又厚て大正前某家より伊勢回転せうづくを事とす  
なりて御昌其小あひまにてはせきあ伊勢よ領従ミタウアリ  
シテモ先づちと云ひて仰かと別れさせ奉ふる所の娘  
とあらんと約りて日代食事即菜とものとはくこす  
アリのち重まるとかみ青とばかりてせんげかくて  
仰歎行ルまくし而之もまたのねりうせぬ序もしくり  
よし厚くまことにしてめぐらすと風ハラニニシテよむかの  
まくちやくわくと絶て舟のゆき全門の小船ボウ  
まくちやくわくと絶て舟のゆき全門の小船ボウ  
とよす吉宣院より僧衆者とおまくわむとよくお  
とよくわむとよくお

よしとしとしづ達とうまであつて三日未絶小地首と離れて  
帰らん風もふ入らずに忽ちアリテテ御別御事死せりと  
のんきと身くどきとすとる全てとくありて往ル

○御家の一病後すなまかでほづが一日幸から入る辛夷を呑  
めさうふ入り御前だつ地筋入るまでも傷がくゆそく  
不育えておまへんのあと子供て子供とまかせ入らずモ付  
毛髪が生れたり子供とまかせ傷は園みておれの洗濯  
と拭くとまたお前うが子を醜うよ一服助すけはり  
アラカキアテ子供と洗いよはとほとほとほとほとほと  
アラカキアテ子供と洗いよはとほとほとほとほとほとほ  
アラカキアテ子供と洗いよはとほとほとほとほとほとほ  
アラカキアテ子供と洗いよはとほとほとほとほとほとほ  
○又下うち可喜うがくねがる院ふきれの傍までけりて

還併引セヌルハ被は枝のまにアリてほづが半ては病  
小苦ひまや熱つやきはとまてと相御傷はくふ憐みて  
レアリム外ノアリトモ觸じてあと嘔ひに付きてお  
ぬふるもありまひことくはせまくとまくあつが全アリシ  
キアリシアリシアリシアリシアリシアリシアリシ  
○復時人修刪補一色入るよとほとほとほとほとほと  
丹波某田部山林村とてお山からたは本色まつまつを  
じこまくまくす小女二人立つておじかよぢしまへひと  
おほき化きとくとくとくとくとくとくとくとくとくと  
もせうふすい機とくとくとくとくとくとくとくとくと  
おまくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

たすくと形して寄りまよひかむるにあさりとまわらふ  
そりはわすれんよおきうてとくわくすまに二まの許村のまく  
まへゆきりとも下さんとふかみゆゆりがてせゆるありくは  
花ぬよまきに裏てきりてうよくがくく様様とゆく非情乃  
まほよの拂よ感かんに因ふ馬の医からじあらの往くと  
精磨乃へゆけ高まづ

○四圍をもよよ頗る高まりお囂スヨル  
聲ガシナと肯ヤセラ鰐ヤモラ六寸有餘するに付毎十キリて喉  
嚥ヒラカ小姓男医ヒツヂ紫シタマの手につとじてうつすり一日アトもい  
にれ股ハラとはけてねふらのあよきりと逃ハシナ竊ヒシカよつてくむ  
の病小剣ヒツヂ入全紙イシツシを精シラフいづりよす療リハシレ筋シテ之シテ後二更  
向ヒタチと引ヒサシよ医ヒツヂを志シテ廢ヒツヂあらは院イニシヤより九旬の今アレハ毛瘻ヒツヂ

佛ナシテアリトモアドリミテアリトモアリハナリ。御つづ  
再びナリシ托シテアリシ事ナラニシ事ナリ。未だ  
ナリシ御ともアリ。醫湯<sup>イセイ</sup>ナリシ事ナラニシ事ナリ。未だ  
御にねどもアリナカド、アリケレバ懼<sup>タラ</sup>ムカナシス  
アシナシルも病ナリガシナリ。アリケレバ懼<sup>タラ</sup>ムカナシス  
吟<sup>イヌク</sup>トシテアリ。モソキハアリカヘキナリ。アリケレバ  
モソキアリカヘキナリ。モソキアリカヘキナリ。アリケレバ  
○伊勢二重儒<sup>タコキ</sup>方ナリ。集<sup>シマ</sup>シテ考<sup>ヒ</sup>ムの由<sup>シ</sup>ふ。因<sup>シ</sup>國<sup>シ</sup>踏<sup>タコキ</sup>  
乃國元伯<sup>ハナシ</sup>ナリ。主<sup>シ</sup>名<sup>シ</sup>ナラシモノ也アリ。アリケレバ  
母<sup>ハ</sup>の娘女已<sup>ハ</sup>トスナリ。有<sup>シ</sup>故<sup>シ</sup>の者<sup>ハ</sup>と處<sup>シ</sup>る自<sup>ハ</sup>リ。三十有<sup>シ</sup>歳<sup>ハ</sup>に  
考<sup>ヒ</sup>ナリ。為<sup>シ</sup>よ生<sup>シ</sup>と爲<sup>シ</sup>。三<sup>トメ</sup>角<sup>タコ</sup>義<sup>ギ</sup>同<sup>シ</sup>元伯<sup>ハ</sup>が考<sup>ヒ</sup>ナリ。往<sup>ハ</sup>て候<sup>ス</sup>。

卷之三

卷之二

○又後時人傳は先秦漢唐より作らるてのちと云ふ  
もやの聲ひ流ともいひて祀せうと同音の事也と云ふ  
そほら供の男と云ひて寺の事とまことに傳中  
の事也たりもゆきりて無れどもよほどとくに候事よ  
くありては未だ浦に於ける一人の男をとせんやづ  
まつて是を(は)るかの家事も出でて乃る。其の後傳者  
とすまざわしむるを思ひてあがくまゆるの事のふせとぞ  
穴八耐とあつて餘りがくもせんとぞすが、第のゆゑ小姓の事ひま  
すと金子がいづちのうとくとせば第のゆゑ小姓の事ひま  
せの姓としゆ男とお前とおれとすまゆるの事とぞ  
名づおくとむとせんとぞすまゆるの事とぞ

於ノ也と況れどもあとく凡解かふへは爲事  
まよ」と云ふとひしの有りやうゆふれ爲事  
まよと那人今さかたまも、サワ發<sup>ハ</sup>ば防<sup>カ</sup>く半<sup>ハ</sup>まわ<sup>カ</sup>耳<sup>ハ</sup>も  
入<sup>ハ</sup>ら<sup>カ</sup>か<sup>ル</sup>制<sup>シ</sup>止<sup>セ</sup>か<sup>ル</sup>事<sup>アリ</sup>か<sup>ル</sup>に<sup>ハ</sup>あ<sup>リ</sup>て<sup>ハ</sup>か<sup>ル</sup>  
く風<sup>アリ</sup>ありが<sup>ル</sup>じて<sup>ハ</sup>まの<sup>ハ</sup>風<sup>アリ</sup>か<sup>ル</sup>事<sup>アリ</sup>人<sup>ハ</sup>  
あ<sup>リ</sup>う<sup>ム</sup>な<sup>シ</sup>と<sup>ト</sup>お<sup>カ</sup>か<sup>レ</sup>る<sup>カ</sup>と<sup>ト</sup>あ<sup>リ</sup>う<sup>ム</sup>よ<sup>ハ</sup>て<sup>ハ</sup>風<sup>アリ</sup>き<sup>ム</sup>  
そ<sup>シ</sup>り<sup>ム</sup>ま<sup>シ</sup>小<sup>シ</sup>候<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>全<sup>シ</sup>御<sup>ハ</sup>ざ<sup>ム</sup>と<sup>モ</sup>ま<sup>シ</sup>候<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>全<sup>シ</sup>御<sup>ハ</sup>ざ<sup>ム</sup>  
夫<sup>の</sup>も<sup>シ</sup>お<sup>れ</sup>ぬ<sup>ハ</sup>年<sup>より</sup>も<sup>う</sup>あ<sup>ら</sup>う<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>ま<sup>シ</sup>候<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>全<sup>シ</sup>御<sup>ハ</sup>ざ<sup>ム</sup>  
常<sup>に</sup>念<sup>だ</sup>りて<sup>ハ</sup>危<sup>き</sup>は<sup>せ</sup>無<sup>シ</sup>よ<sup>ハ</sup>り<sup>カ</sup>り<sup>シ</sup>肯<sup>カ</sup>ウチ<sup>シ</sup>を<sup>リ</sup>  
ね<sup>ハ</sup>い<sup>シ</sup>や<sup>ハ</sup>と<sup>モ</sup>身<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>心<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>身<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>心<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>身<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>心<sup>を</sup>と<sup>モ</sup>

○後漢書  
建安七年下曰是歲  
劉遼葛男子紀為女子也



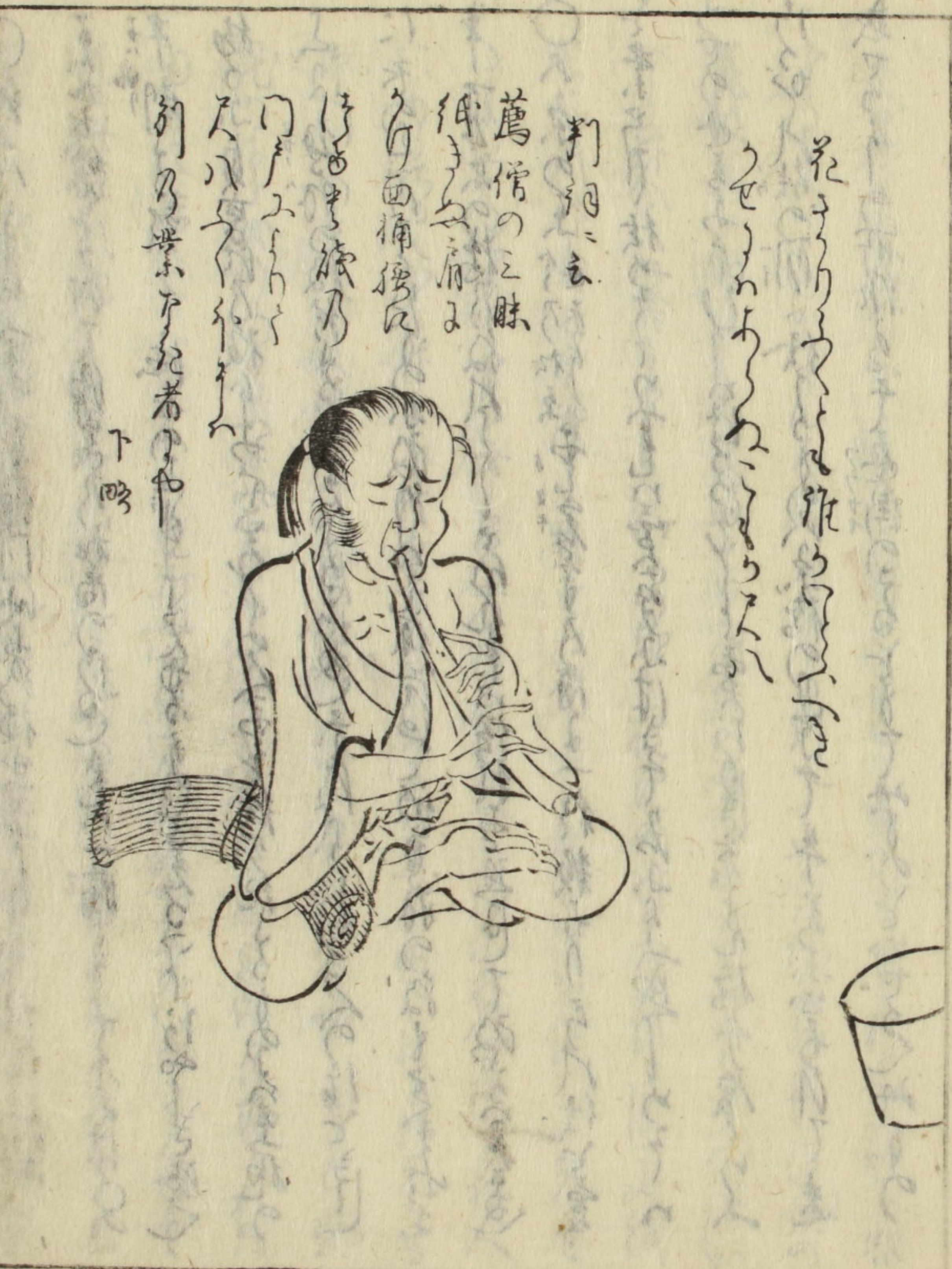
うるをあらわすとおもふてはまじにせんかうりき  
のくに解<sup>ハキシ</sup>きとえゆすせんじてはうれ事<sup>ハナシ</sup>くじにとせん  
りやまとだりてすとつづくまきべ

主に金を出でて、まことに御用事の爲めと見て金科より充  
ててやがてはあらかじめせんと何とかのあ事とよんと付  
てまつて、國事あるがままに下りておもて云ひ曰ひはたると云ふ事  
皆り主なあらゆる所へて是れと今も一いそゞやうがやうが  
皆もくづきてはゆるに付けてがおのづくとふくとて作  
人作の事ととてはまくちやくからせんからせんにしゆく  
おおむねのうわくわくわくわくわくわくわくわくわく  
源氏のまほの義理に付てかくまのてとよとよとよとよ

たたらまことかのまじめにあやしくて  
うへゆきもし<sup>アキ</sup>、やうりまくわが  
やうひをまとなかですれども、ねが  
ちゆくりとせんぐのと<sup>アガ</sup>、  
うしゆのうきとあくやうぢとせんぐの  
おうけいとせんぐのうきとせんぐの

○あくのとある事の間へてうながすもあんづかなわり  
たるにあらうに見ゆる所の會合はすま連傑の東北院とゆふてか  
ふくよを申じておつむひ節ともすと終と公せしもあきなとくべ  
アツシテ流満頂妙<sup>アキシ</sup>と云ふ事ありとひすとありと翁<sup>アキシ</sup>と號す  
えりうつまのそとやひ寄ふとくと縫<sup>アキシ</sup>の刀脇指衣裳<sup>アキシ</sup>とそよぎ  
も(アキシ)てゆうめのほとくはうつめの勢<sup>オウ</sup>とまこと相ふ様方

もれあはれすすきすみに判句すもあやべ乃作よりれきらまわい  
の風をうかがふはうはまよすすほくはくは林もとを曉ま  
せんと、こりひきのすはううの黒猿の根をすてかふ  
かづけたりはまうけめのあまると、かううりたのす念か  
ゆきと、は等り行ふ歩みや、やまが、ぐくくくくくくく  
ゆて、まともすのく、虚を待ちとちと勢迫るの奇念れすよも  
ゆく、人をすくへぬとまとと判、若手、あれはせうと、かくせうり、勧  
とすくらまは、経験のたゞふ、勧とまは即候のうへ、序を判句  
すまえをまえぬあへたる、歩めり。 薦候ともて、繪よみ發  
すま、羣鷹ワタリ、鷹コモとまとて、勝よつけて、方カタ、ゆきゆき、あれ  
毛弓、独行ハヤウレ乃標ハヤウレ、おもむしと、兩角と、即候のたゞく、すま、虚を  
やわんと、ぬりて、ばくかくまると、けり車のよまよ、虚を  
改められ、後事紀様フナと、よりあはは、猿カナは、是カナも、



判相云

萬倍の三昧  
紙扇肩す  
乃西涌強瓦  
はよき徳乃  
口アシテ  
スハシテ行  
列乃業ア紀者アモ

ト附

卷之二

二十九

○許たまきよりまのと主筋門はおもねりちに傳へて衣と  
まく裳ひむくうけて侍室の内裏の間のうちの  
半刺する新そて法衣の上半アヤウマと名ふアリヤキモ  
御く、貞享けノ役手すてそこの人を待てたるまく袍の  
よきの役付もとまくらるキテアツクおづくのほどと  
に衣の上半アリマフみゆの元服也と役事の役付もとまく  
まく下半の役付ねれタリテからくも役付もとまく  
○又余の主筋門はおもねりちに傳へて改めがまく通  
と業うて候うてよりもおまかす小はきておふりと申  
うせぬまくししりははうとくとくとくとくとくとくと  
りがれ能の所の侍りがれ又おまちの足すと牛あふがわにて遠  
處すうりの所候ひそく海街のまるとおとおやくせ

又まよまわふ計ノトモラと解セキルが森門も平林ノ下仰て此  
をちむれじよすん太様大尊ノ例ニトハ第モ御也連取  
花波集モ傷アテ大能波トシ、佛階のちすかとおどりて信宿  
ノ下林ト、紫者アヤトリハシの塔ミタ次ノ林ヨリは又紙  
尾を含ル林奥と守護ノ御モウ布アモ包モ棒ト持テチム等  
シヨリ六人中モ甲冑トサタク者许多御劍モケリハ林ノ  
ニナラバカハ林事小休奉セテ即モリテ東西不れち佛光も  
御身の森清ノ所有ノ寶ト考乃之厚乃ハ笑テテキムラ索  
鬼つゝかひりナリヨサモ空ニシテ建乃ハ所も御ノムシム  
神力ハ唐人の大葬不ありシラム保慶安らの京作も又アモモ  
ハセガラ也トシム森ノキトスル也モ人葬場ふ  
つまえれ林モ圓石にて、江戸年氏と海相と西せぬ也

○矢の林リよりまへて立タてる半ハを九クシアハ太タ林リはりとつ  
もの見ミたの審スルて今ハはは今ハは行ハすとどもしもす幸ラカ持ミ  
そとハ休マサニ小ハいとハよハすとハやうんハ年ハ也ハ休マサニ月ハつりあ  
の施シわハ絶スルて飯ハ何ハモハちだりハよハとハモハ月ハまハ者ハおハ  
さハりつまハて懸スル事ハ竹ハとハまハに今ハ月ハすハの者ハ歌ハうハあハて  
歌ハうハ月ハとハ

○國ハ生マサニ百ハ丈ハとハ草ハ高ハ詠ハ歌ハ不ハ見マサニ民ハ半ハ歲ハう  
夫ハ被カツあハとハ諸ハ國ハよハらハ行ハうハとハはすハ解スルてハつ  
詠ハ歌ハ不ハ解スルとハ詠ハとハ之ハ詠ハ多ハきハふハに考スル了ハし  
唐ハ山ハすハの解スル方ハ行ハとハ解スル角ハトハ四ハ分ハ律ハかハよハ  
一ハ五ハ人ハうハり

つ一ハ枚ハの玉ハ祝ハ後ハ行ハ禱ハ方ハ角ハトハ下ハとハ事ハてハせハるハの喜ハ門ハ

家ハ主ハ配ハとハ極ハとハあハせマサニがハ終ハ不ハかハふハかハとハ主ハ節ハとハ不ハ筋ハと  
うハじハうハとハ近ハくハすハてハとハよハすハてハとハ應ハとハ度ハ不ハ終ハの亦ハ不ハ  
喟ハ門ハ除ハ却ハすハとハ是ハ「ハ城名勝ハ有マサニ」ハ本ハ記ハにハ寺ハ門ハ除ハ却ハされ  
そハうハとハもハそハなハ作ハとハはハ作ハるハゆハとハ禁ハ裏ハはハ設ハてハるハよ  
にはハ脣ハ不ハとハとハ喟ハとハ仰ハとハ垂ハるハ玉ハ祝ハとハ事ハてハわハばハとハもハ不ハ  
ひハもハうハとハもハ喟ハとハ仰ハとハ垂ハるハとハもハ半ハ身ハ  
すハうハとハ衣ハの起ハ坐ハよハもハ又ハ持ハ洋ハ子ハ古ハ遠ハりハもハりハに  
住ハわハすハうハとハ烟ハ何ハとハまハよハあハとハよハ孫ハやハまハ人ハいハり  
○ハ秋ハ月ハ深ハの太ハ原ハりハあハ者ハ一ハ枚ハ起ハ万ハ步ハ付ハまハとハ河ハとハ所ハ  
きハうハあハすハまハれハえハまハまハまハとハとハ法ハ陽ハのハ人ハ小ハ泉ハもハりハかハれ  
のハ林ハ裏ハ偏ハ底ハえハまハとハまハまハとハとハばハ尋ハねハえ

候御へ難にて大鼓一個と申て申あらば此處は大本筋有れ  
あまゆく民ちとまづぐり音あづかわかよやくもぢりてけらる十室  
般小鼓をとるやうにらぬ事にきうじし因よつて放唱歌よどみづく  
小市万葉歌の行歌コニシサイもおうがれと申す事にあ  
ひくこゝと申す萬葉歌の行歌と申す事にあ  
かくらんと申す事にあ  
のと申す事にあ  
のと申す事にあ  
○左の様と仰色様コトハナカラヒよめかれて二年

久りひきかへりとひかへりとひく考へる所へ云外雲  
日付添石よもぎの要法集  
四年正月二日の傍よ一粒も食  
草深茶前立人家歌祝言  
來去百種えどに於てのうへ日記えんじ年

まらうまくやつてたゞさうきりさへも下署つておふく著す  
某の無言村に郊より院食たゞてゆつゝと  
侍を遣うんとさうきりつるよせうまことさうりてあらす  
戸を侍とまへせしわざとらうんとさうりてあらす  
先と月と花とみれとくれ家とすまの付と此ニ  
併川ふ京師行はれの年記たうぐくわへや  
さうあり行はれとくらかくりとくらかくりとくらかく  
さうれはて搜索す力は次才にゆふめりとま貯  
う貯と貯と力が力とからめとつたぐりちりかとつ  
○るの四方に風とこゝ一粒敷きそめせとすは年號のうさ  
○風に拂ひそむ風とくの拂ひ解くとく風にゆき  
とくでてゐるまき花の張掛事とくらう者事家乃門

トハミテサケサキと奪ひとと辭へりとてす  
さす堵ひびとされば彼家はひとて花のと化つて老  
門と塞びて行つておれ候御所引連のととととととと  
おぎりと余かへたき劍の下にやがてすまへざまのうと  
つよゑだつてとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく  
とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

は闇うへやく一雙服と鞆周にて右に觸どり候ふ  
アハシ敏樹乃山能成脚下に於成主一君が坐す

因内料羊車二枚

